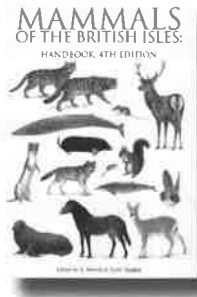


## 書籍紹介



### 『Mammals of the British Isles: Handbook 第4版』

Harris, S. and Yalden, D. W. 編著

2008年  
The Mammal Society 発行  
799頁

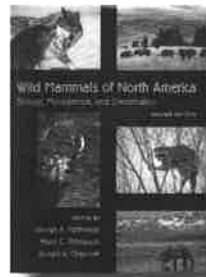
太田素良・浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

ユーラシア大陸の東西にほぼ同サイズの島国が存在する。ともにこの大陸と微妙な歴史的関係を保ちつつ、海洋立国を模索し、西の島国は全世界を手中に入れ、新大陸に存在するスーパー大国とオープンな友好関係を構築、一方、東の島国はそのスーパー大国の属国のような立場で今日に至っている。かくの如く、文化・社会的な様相はだいぶ違うが、動物相も大分異なる。その理由の一つが、最終氷期とその前の氷期における大陸氷床の有無であろう。西の島国、すなわち英国は北極から延長してきた大陸氷床および周氷河環境、さらに最終氷期後の急速で大規模な人為的改変から、動物相は随分単調なものとなった。このことは評者（浅川）の学位論文の一部である日英寄生線虫相の比較からも実感した。畢竟、英国産動物相（寄生虫相）とはまったく退屈で、この国に対して興味を持つことは無かった。であるのに、世紀の端境期、野生動物医の専門職修士号を得るため、渡英することになるとは誰が予想し得たか。

それはともかく、なぜ、評者は本書を手にしたのか。寄生線虫相の生物地理学的な研究（前述）でモデルとした宿主動物は、ネズミ亜科の *Apodemus* 属とハタネズミ亜科諸属である。そして、全北区に産するこれら野ネズミ類で記録された寄生線虫類のチェックリストを作成する際、本書の存在を初めて知り得た。そこで、早速、購入し、評者のゼミに配属された新人に書籍紹介の課題図書として手渡した。この学生も言及しているが、この本は日本で流通しているハンドブックのイメージとは相当乖離した事典サイズの巨大な書物である。そのため、本書分析にはそれなりの力量が要されたであろうが、下記のような文案が届いたので紹介する。（文責 浅川）

本書はイギリス諸島に生息する哺乳類に関するハンドブックと称するには、とても大部な書籍である。第1章では導入として第5章以降の諸項目について簡単に解説がなされている。第2章ではイギリス諸島の哺乳類相に関して、バイオマス、歴史的変

遷と傾向、そして保全について述べられる。第3章では動物相の変遷について中生代と新生代（第三紀と第四紀、特に、更新世）に分けて述べられ、この章に収められた4ページにわたる表では、当該諸島の更新世と完新世における絶滅種を含めた哺乳類の生息状況がまとめられている。第4章は法律に関する章で、国際法、連合王国、アイルランドおよびイギリス王室属領それぞれの野生動物に関する条例・法律・法規、哺乳類と哺乳類学者に対する法令などに分け解説された。第5章から第13章では、ネズミ目（齧歯目）、ウサギ目、ハリネズミ目・トガリネズミ目、コウモリ目（翼手目）、ネコ目（食肉目）、アシカ亜目（鯨脚類）、偶蹄目・奇蹄目、クジラ目、そして逸脱種と外来種化した哺乳類に関し taxa by taxa 形式で解説されていた。すなわち、分類の目、科および属それぞれの概要が記され、続いて種ごとの詳細な記述がなされた。なお、各種解説では、サイズ、フィールドサイン、毛皮、解剖学的特徴、変種・品種を含めた地理的分布、生息環境、歴史、食性、繁殖、寄生虫およびその他病原体などの情報が列挙された。章冒頭には代表種のイラストが描かれており、分類目への直感的把握の手助けとなっていた。図表・写真も多用されて理解し易い。もちろん、イギリス諸島に生息する哺乳類の様々な事象を研究する上で有用なのは間違いないが、少なくともユーラシア大陸とその周辺島嶼（日本列島を含む）に産する近縁種の情報を得るためにも役立つのではないだろうか。（文責 太田）



### 『Wild Mammals of North America: Biology, Management, and Conservation 第2版』

Feldhamer, G. A., Thompson, B. C. and Chapman, J. A. 編著

2003年  
The Johns Hopkins University Press 発行  
1216頁

高木龍太・浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

かつて本誌で、北米大陸産哺乳類の寄生虫（病）に関する書籍紹介をした（浅川 2005）。アライグマ、マスカラット、ハイイロリスなどが外来種化している現状では、ヒト・動物への感染リスクを精査する上で重要な作業の一つであったと自負している。しかし、原産地における宿主の生態や行動などの情報を欠いたまま、寄生虫病のような応用的な面にいきなり踏み込むのは、如何

なものかという葛藤もあった。

よって、本書の分析は願ったり叶ったりであったが、実は、外来種問題とは全く異なった文脈で知り得た。浅川のライフワークの一つに、ハタネズミ亜科寄生線虫類の生物地理がある。研究ではこれまでになされたこの動物群の線虫相について、完全な報文を調べ上げる必要があった。そして、最近、そのチェックリスト作成を思い立ったが(浅川 2019)、その過程で、図らずも本書の存在を知り得た。冒頭のような事情から、さっそく、本書を購入し、新人ゼミ生に書籍紹介を課題として与えたところ、下記が送られたのでその全文を掲載する。

さて、浅川にとって肝心のハタネズミ亜科に関する記述であるが、*Microtus*、*Neofiber* および *Ondatra* 各属のそれぞれ章が割かれていたが、*Arborimus*、*Lemmys*、*Myodes* (本書では *Clethrionomys*) および *Phenacomys* 各属は 349 頁でその他 voles として掲げているのみである (*Lemmus* 属や *Dicrostonyx* 属などに至っては字句すら欠落)。全てを網羅という姿勢は感じられず、少々残念であった。もっとも、中・大型の哺乳類の生態学や行動学では重要な文献ではあるので、外来種問題を考察する上では参考書の一つとして準備しておくことを推奨する。

(文責 浅川)

本書は北アメリカの野生哺乳類について次の章構成となつて詳述されていた。

- 第 1 章 オポッサム類, モグラ類, コウモリ類およびアルマジロ類
- 第 2 章 アナウサギ類とノウサギ類
- 第 3 章 ネズミ類
- 第 4 章 ハクジラ類, 垂目 (ハンドウイルカ, ネズミイルカ, マッコウクジラとその他ハクジラ類とヒゲクジラ類)
- 第 5 章 肉食類
- 第 6 章 鯨類と海牛類
- 第 7 章 有蹄類
- 第 8 章 外来種

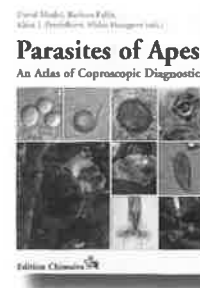
さらに各章はいくつかの節で構成され(計 55 節)、いずれも多彩な学問分野からの膨大な情報が提供されていた。例として第 1 章のオポッサムでは命名法や分類体系, 地理的な分布, 生物学的特徴(体長・体重, 骨格など), 遺伝, 内部形態, 生理・繁殖, 発育, 性決定, 食性他生態・習性, 死亡率, (毛皮・食料など) 経済的価値, 狩猟対象としての実態, 今後の研究動向, 一般に流布する誤解・迷信などが, イラスト, 写真, 表とともに詳述されていた(各章には引用文献表が完備)。私(高木)が最も興味深

かった項目は繁殖についての項目であり(将来, この方面に就業希望), 繁殖時期はもちろんのこと, 発情周期や妊娠, 誕生, 性成熟までの各ステージの具体的情報が明示されていた。他にも, 米国の州ごとの同腹仔の大きさや性別の割合, 時期ごとの数が調査対象の母集団数とともに記載されていた。

北アメリカに生息する野生哺乳類を研究・飼育・狩猟・取引の際の情報入手の源泉となることは無論, 外来種として日本で知られるアライグマやマスカラットに対応する方やかなの国の動物に強い関心をお持ちの動物愛好家の方には是非一度手に取って頂きたい。(文責 高木)

#### 引用文献

- 浅川満彦. 2005. 書評アイオワ大学出版会刊 (Samuel, W.M. ほか編) 『Parasitic Diseases of Wild Mammals 第 2 版』. 野生動物医学会ニュースレター *Zoo and Wildlife News*, (21): 43-45.
- 浅川満彦. 2019. 1993 年までに記録された日本以外に産するハタネズミ亜科動物からの線虫一覧. 酪農大紀, 自然 44 (1): 35-76.



#### 『Parasites of Apes: An Atlas of Coproscopic Diagnostics』

FModrý, D., Páfcó, B., Petrželková, K. J. and Hasegawa, H. 編著

2018 年  
Edition Dhimaira 発行  
198 頁

鈴木夏海・浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群)

国内の動物園で飼育される類人猿が保有する寄生虫同定(あるいは寄生虫病診断)について, 担当獣医師から相談を受けることがあるが, 参考となる図書が中々無く苦慮していた。たとえば, 先に本誌で紹介した霊長類と寄生虫との宿主-寄生体関係の生態学の概説のような文献(牛込・浅川 2009)はあるが, 糞便検査や病理解剖で遭遇する材料を簡便に同定するのが欲しいのである。しかし, 著者(浅川)と指導ゼミ生が, 長年, ご指導を受けている大分大学名誉教授・長谷川英男博士から, 本書をご紹介頂いた。豊富な写真を含むアトラスであり, 簡便性は一目瞭然ではあったが, 試しにゼミ配属された新人(鈴木)に読み込んでもらい, 当該の書籍紹介をしてもらうことにしたので下記に示す。なお, この学生は, 将来, エキゾチック動物医療の専門家を希求し

ている。

(文責 浅川)

エキゾチック動物の寄生虫を扱うには『獣医学教育モデル・コア・カリキュラム準拠 寄生虫病学』で学ぶものでは対応できないことは予想していたので、食欲に情報を集めようと思っている。とりあえず、人獣共通感染症の問題を考え、まずは類人猿の寄生虫を本書から学ぶことにした。

本書は類人猿の実地(生態)調査の概要紹介から、それら動物から得られる寄生虫検査材料の回収・保存法、類人猿を含む霊長類の代表的な内部寄生虫(トリコモナス類やジアルジア類などの鞭毛虫、様々な繊毛虫、ほかプラストシスチス類、クリプトスポリジウム類、アメーバ類などの原虫、住血吸虫類や裸頭条虫類などの扁形動物、回虫類・鉤虫類・腸結節虫類・開嘴虫類・蟯虫類・旋尾虫類・鞭虫類・毛細線虫類などの線虫、ほか鉤頭虫などの蠕虫)の特徴が列挙され、これらに加えて、寄生虫として誤解させる偽寄生虫 pseudoparasites についても触れられていた。手法は形態が中心であるが、一部は遺伝子検査も紹介されていた。

それぞれの属種ごとの形態やライフサイクルの解説が文字だけでなく、豊富な写真・図などでもなされており、寄生虫同定を実際に行う上で実践的にあると感じた。さらに、これらに起因する寄生虫病に関しても、症状、人獣共通感染症の危険性にまで網羅されており、動物園獣医師は必携であると思う。

通読により、内部寄生虫はほとんどすべての霊長類の体内に存在し、症状は呈さないが、他の病原体や寄生虫の重度感染した場合に症状が顕在化することを学び取った。また、野生サル類が人獣共通感染症の原因寄生虫を保有していても、多くは無症状であるため、野生サル類の生息する地域住民は人獣共通感染症の観点から衛生には注意すべきとも実感した。

日本人として本書と接してデメリットを感じた点はすべて英語表記であるため、読むことが苦難であると警戒されようが、大ぶりの写真・図が豊富で、しかも綺麗なため私(鈴木)のような初心者でも大丈夫である。

(文責 鈴木)

教育面での感想が多かったが、研究面でも有益(実利的)であった。たとえば、現在、前述した長谷川教授とわが国で流通していたペットサル類に寄生していた *Ternidens* 属線虫の記録を投稿中であるが、この円虫類(Chabertiidae 科)についても本書でしっかり記載されていた。ところで、類人猿の繊毛虫類としては機械的に「バランチジウム」と記憶していたが、どうやら *Balantidium* は過去の名称らしく、現在は *Balantioidea* となっていたことを本書で初めて知った。ゼミ生は絶賛であったが、難点を挙げるとすれば索引が無いことであり、これが利便性を大きく

減じている(もっとも、タクサの数は多くは無いので致命的ではない)。本来ならば索引が配置されるページには、代わって、膨大な引用文献が明示されており、類人猿寄生虫(病)研究のチェックリストとしても活用できるだろう。最後に微妙な感想を披歴する。本書執筆者一覧が冒頭に写真入りで掲載されていたが、その多くが若い女性であった。類人猿生態研究のパイオニアが女性であったことは良く知られるが、その寄生虫までも同様であったことを気付かされた。

(文責 浅川)

#### 引用文献

牛込直人, 浅川満彦. 2009. 書籍紹介『Primates Parasite Ecology』. 野生動物医学会ニュースレター *Zoo and Wildlife News*, (29): 32-33.



#### 『鳥の鳥類学 南西諸島をめぐる自然史』

水田 拓・高木昌興 編著

2018年  
海游舎発行  
440頁

丸山雄嗣・浅川満彦(酪農学園大学獣医学群)

日本列島に展開する在来野生動物とその寄生虫とで形成された宿主-寄生体関係の由来を根源的課題として獣医大進学を決し、結局、これをライフワークとして同じ大学にしがみ付いている。ある地域に生息する生物の歴史的な過程を解き明かすサイエンスが生物地理学である。そして、「ある地域」を日本列島とした瞬間、このサイエンスは、「島の生物地理学」という由緒正しき学問分野に昇華し得る可能性がある。そのような点で、この国(土地)に生まれたことを幸運に思う。

ところで、生物地理学の解析では、標的動物群が生息する土地の歴史(地史)を絡めて論考する。大概、この地史とは島周囲の海峡形成史であるが、そうすると、海峡を易々と超えてしまう動物(あるいはその寄生虫)は、興味はなかった。そのような理由から、(海を地理的障壁としない代表的存在である)鳥類は知的興味の対象外としてきた。しかし、後年、勤務先で生きていくために、野生動物学を教える立場をとり、鳥類学および鳥類医療学についても学ぶことになった。また、専門としている寄生虫学で

も、配属ゼミ生・院生の中に鳥類寄生虫相・寄生虫病などで卒論や学位論文を志向するものが出始めた。なんと、プロとして一生の職にしている者もいる。実際、そのような方が筆頭の論文が本書(164頁)でも引用されていた(Yoshino et al. 2014)。まさに、青は藍より出でて藍より青しであるが、そのような一連のデータ群に接するうち、根源的な課題であった寄生虫の生物地理学的な側面でも、鳥のそれは、その対象に応えることが可能な対象ではないかと夢想しつつある。その解析は将来に委ねるとして、参考になる書籍が刊行された。いつものように、ゼミに配属された新人(丸山)との共著で紹介する。なお、本書のように日本の島嶼に生息する鳥類の生態と生物地理に関する論は内匠・浅川(2018)で評した書籍も参考になろう。(文責 浅川)

非常に端的に、著者の考えに加え個人(丸山)的感想をもって記述すると、本書は鳥類学者を失った日本に、これからの鳥類学の方向性を提示してくれるバイブルとして刊行されたとなろうか。山階鳥類研究所名誉所長・山岸 哲氏は国立科学博物館・森岡弘之氏を「日本最後の鳥類学者」と位置付けたが、その理由として同氏の学識が分類学、解剖学、形態学などにとどまらず、生物地理学、生態学あるいは行動学までも含めた幅広い分野にわたっていたからとしている。つまり、それほどまでに、鳥類相手に一個人がこのような広範な分野を網羅している研究者は、現在では存在しないことを意味する。しかし、学問の細分化は現在サイエンスの本流ならば仕方無い面もある。

そこで、複数研究者が同方向で課題に迫る方式で、本書のように南西諸島という場を基軸に展開するものが登場する。この本は南西諸島で鳥類の調査を行っている28名の専門家が、それぞれの研究について解説したものである。4部構成で第1部“現在と過去の南西諸島の鳥類相”、第2部“分布と生態の関係を読み解く”、第3部“島に特徴的な生態と行動”、第4部“島嶼性鳥類の保全の科学的アプローチ”となっている。さらに、各部5ないし6つの章が包含され章冒頭にはその研究に関するコラムも掲載されており、初学者である私(丸山)も非常に読み易く、かつ鳥類学の奥深さを感じた。

それらの中で最も興味を抱いたのは第4部にあったヤンバルクイナに関する研究であった。日本で唯一の“飛ばない”鳥であるヤンバルクイナは、沖縄北部の森林地帯にのみ分布している。分布域が狭いことから個体数も少なく、人為的な環境の改変や外来種によって捕食されるリスクにより絶滅の危機にある。個体数減少の原因とそれを防ぎ個体数を回復させるためにはどうしたらよいか、実際に行われている飼育下繁殖や人工孵化への取り組

みとその手法などの解説があり、ヤンバルクイナの過去から現状まで幅広く学ぶことが出来た。マングースやノネコなどの外来性哺乳類による生態系の破壊にまで話はつながっており、ヤンバルクイナという一種の生物を通して、環境保全といったより大きな視点へと読者の目は移っていくだろう。本書はそのタイトルから南西諸島という限られた地域に焦点を当てているが、そこで得られた研究結果は、約6800個の島から成る日本という国の鳥類学へとつながっていくと考えられる。

現在・過去から得た情報を分析し、結果を解釈することが出来ても、将来的にどのような生物相になるのかといった未来の出来事を予見するのは困難なことである。しかし、ヤンバルクイナは、日本産トキを絶滅させてしまった過去の失敗を反面教師とし、飼育下繁殖に着手することで絶滅を食い止めている。先達の知恵を借り、それを実行に移すことで変えられることがあるという事実が大変価値のあるものだと感じた。本書から得られるものは、鳥類に関する知識のみならず、研究によって得られた結果を次に生かすという“科学”のプロセスそのものである。獣医療も科学を基盤として成立しており、この点は獣医学生として忘れてはならないであろう。(文責 丸山)

#### 引用文献

- 内匠夏奈子, 浅川満彦. 2018. 書評『そもそも島に進化あり』. 鳥学会誌, 67: 162-164.
- Yoshino, T., Hama, N., Onuma, M., Takagi, M., Sato, K., Matsui, S., Hisaka, M., Yanai, T., Ito, H., Urano, N., Osa, Y., Asakawa, M. 2014. Isolation of filarial nematodes belonging to the superorders Diplostriaenoidea and Aprocotoidea from wild and captive birds in Japan. *J. Rakuno Gakuen Univ., Nat. Sci.*, 38: 139-148.

\*註:この雑誌は酪農学園大学大学院で刊行された査読誌『*Healthy Soil and Life Sciences* (HSLs) 2014』に掲載されたが(この雑誌自体、名称が*Research of One Health*に変更)、数年間を経て当該査読誌は廃刊された。当該論文は、当時、掲載媒体として使用された当該大学刊紀要自然科学編(査読誌ではない)上に掲載されている。